

第三章 現界の苦行 (三)

高熊山の修行は一時間神界の修行を命せられると、現界は二時間の比例で修行をさせられたのである。しかし二時間の現界の修行より、一時間の神界の修行の方が数十倍も苦かったのである。現界の修行といつては寒天(寒いの)に襦袢一枚となつて、前後一週間水一杯飲(呑)まず、一食もせず、岩の上に静坐して無言であつたことである。その間には降雨もあり、寒風も吹ききたり、夜中(夜中)になつても狐狸の声も聞かず、虫の音も無く、ときどき山も崩れむばかりの怪音や、なんとも言えぬ厭らしい身の毛の震慄(森立)する怪声が耳朶を打つのである。寂しいとも、恐ろしいとも、なんとも 形容のできぬ光景であつた(る)。…… たとえ狐でも、狸でも、虎狼(虎狼)でもかまわぬ、生ある動物ができて生きた声を聞かして欲しい。その姿なりと、生物(生物)であつたら、一眼 見たいものだど、憧憬れるようになった。ア、生物(生物)ぐらい人の力になるものはない …… と思つてい(お)ると、かたわらの小篠の中からガサガサ(ザア)と足音をさして、黒い影の動物が、自分の静坐する、一尺ほど前までやつてきた。夜眼には、確にそれと分(判)りかねるが、非常に大きな熊のようであつた(慥に大きな熊であつた)。この山の主は巨大な熊であるといつたことを、常に古老から聞かされておつた。そして夜中

現界…… 顕界と同じで、現実社会のこ
と。

に人を見つけたが最後（ら）、その巨熊が八裂きにして、松の枝に懸けてゆく（おく）ということを聞いていた。（おつたので）自分（王仁）は今夜こそこの巨熊に引裂かれて死ぬのかも知れないと、その瞬間に心臓の血を躍らした（思った）。

ままよ何事も惟神（神隨）に一任するに如かず……と、心を臍下丹田に落着（落付）けた。サアそつなると恐ろしいと思つた巨熊の姿が大変な力となり、その呻声が恋しく懐しくなつた。（て堪らぬ様に成り、）世界一切の生物（生物）に、仁慈の神の生魂が宿りたまつたということが、適切に感じられたのである。

かかる猛獣でさえも寂しいときには力になるものを、況んや万物の霊長たる人においておやだ。ア、世界の人々を悪んだり、怒らしたり、侮ったり、苦しめたり、人を何とも思はず、日々を暮してきた自分は、何とした勿体ない罰当りであつたのか、たとえ仇敵悪人といへども、皆神様の霊（聖霊）が宿つてい（お）る。人は神である。否人はかりではない、一切の動物も植物も、皆われわれのためには、必要な（力）であり、頼みの杖であり（る）。神の断片である。

人はどうしても一人で世に立つことはできぬものだ。四恩（社会の御恩）ということを忘れては人の道が立たぬ。人は持ちつ持たれつ相互に助け合つてゆくべきものである。人と名がつけば、たとえ其の心は、鬼でも蛇でもかまわぬ。大切にし（為）なくてはならぬ。それに人はすこしの感情や、利害の打算上から、たがいに憎み嫉み（嫉み）争つとは、何

仁慈の神の生魂……情けと慈しみに満ちた大神さまの生きた魂といえ、その顕現ます聖師の本霊。

万物の霊長……万物の中で、もつともすぐれて霊妙なもの、すなわち人類。

たる矛盾であろう、不真面目であろう。人間は神様である。人間を置いて力になってくれる神様がどこにあるであろうか。

神界には神様が第一の力であり、便りであるが、現界では人間(様)こそ、吾等(我等)を助くる誠の生きたる尊い神様であると、こころの底から考えてくると、人間(様)が尊く(て)有難くなつて(有難く思われて争論などは到底出来るもので無い。出来る事なら人間様は第一、禽獣虫魚と雖ども)、粗末に取扱うことは、天地の神明にたいし奉り(て)、恐れありということをし強く、悟了したのである。

これが自分(王仁)の万有に對する、慈悲心の発芽であつて、有難き(末に仁愛の)大神業に奉仕するの基礎的実習であつた(のであります)。ア、惟神靈幸倍坐世

瑞月

万有に恵みの露をまくばりて

神の御国へすくふ真人

一日の吾が玉の緒は世の人の

幾十年の生命とぞ思ふ

天地の神明……天界と地上における神々のこと。

仁愛の大神業……みろくの神の大神業となれば、聖師さまのお働き以外にはありませんね。

惟神靈幸倍坐世……神様のみ心のままにみ幸はえを賜りませ。つまり自分の欲するようにして欲しいという「人ながら」の願い事ではなく、すべてを神さまのみ心に任せしめますということ。